

妊婦自身の出生体重と早産発症リスク

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芝田, 恵, 小川, 浩平, 左合, 治彦, 荒田, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3292

妊婦自身の出生体重と早産発症リスク

Association between maternal birthweight and risk of premature delivery

○芝田恵¹, 小川浩平¹, 左合治彦¹, 荒田尚子²

国立成育医療研究センター 周産期・母性診療センター 産科¹ 母性内科²

【背景・目的】

出生体重と将来の疾病発症リスクとの関連についての先行研究は多数存在するが、将来の妊娠転帰に関する報告は少ない。そこで今回我々は妊婦自身の出生体重が早産発症に及ぼす影響について検討した。

【対象・方法】

2003～2005年と2010～2012年に当センターで行われた単施設コホート研究において、参加者が自身の母子手帳を持参し、そのデータが確認できた妊婦を対象とした。妊婦自身の出生体重に基づき参加者を4つのカテゴリーに層別化し、早産の発症頻度について傾向分析を行った。妊婦自身の出生週数や妊娠高血圧症候群(PIH)合併による媒介効果を除外するため、sensitivity analysisとして正期産で出生した症例、PIHを合併しなかった症例に限定して同様の解析を行った。

【結果】

解析対象者942例中、早産は69例に認められた。4つのカテゴリー(2500g未満, 2500-2999g, 3000g-3499g, 3500g以上)各々の早産率は、10.8%(4/37), 10.4%(29/280), 5.9%(26/439), 5.4%(10/186)であり、妊婦自身の出生体重カテゴリーと早産の発症との間に有意な負の相関を認めた(P for trend : 0.020)。妊婦自身が早産で出生した症例やPIH合併症例を除外しても、同様の傾向が認められた(P for trend : 0.010, 0.043)。

【結論】

妊婦自身の出生体重が低いほど、早産の発症率は高くなる可能性が示唆された。未熟児出生の予防は、次世代の早産リスク減少に寄与する可能性がある。